

問い続け、学び続ける子どもたち

～子どもの言葉でつくる授業～

1. 研究主題について

(1) 本校のめざす子ども像

本校の教育目標は、「豊かな情操と知性を身につけ、明るく、美しく、創造性に富む児童を育成する。」である。昨年度から研究主題を、「問い続け、学び続ける子どもたち」とし、研究を進めてきている。これからの社会を生き抜く子どもたちには、身の回りにあるさまざまな問題を自分たちの力で解決していく能力が求められている。対象とかかわり、そこから自らの力で問題を見つけ、自らの力で対象・他者・自己との対話を繰り返しながら問題を解決していく子どもたちを育てるのである。

(2) 問い続け、学び続ける子どもたちとは

子どもたちは対象と出会うことによって興味や疑問が生まれて、もっと考えてみたい、確かめたいという気持ちになる。昨年度より本校の研究に携わってくださっている鹿毛雅治先生（慶應義塾大学）は、子どものこのような気持ちには「なんでだろう？」といった知的側面だけでなく、「わくわく」といった情動的側面や「よしやろう」といった意欲的側面も含まれると述べている（鹿毛 2007）。我々はこうした内面から発せられる問いこそが、対象・他者・自己との対話となり三位一体の学びを先導するものであると考えた。「問うこと」を繰り返すことが「問い続ける」ことであり、「問い続ける」態度を培うことで、かかわり合いを大切にした「学び」が生まれる。「学び」を継続させることが本校のめざす子どもの姿であり、「問い続け、学び続ける子どもたち」である。以下に具体の姿を示す。

① 学びを追究する子ども

- 好奇心を高め、疑問をもつ
- 様々な方法で、解決の見通しを探ろうとする
- 身につけたことをもとに、考えを創ったり広げたりする

② 他者とかかわりを大切にする子ども

- 分からないことをたずねたり、困っている子を助けたり、友だちと積極的にかかわる
- 友だちの考え方を取り入れる
- 友だちの話に耳を傾け、自分なりに解釈しようとする

③ 学びを実感する子ども

- 学んだことを表現したり、友だちに伝えられたりする
- 自分の考えを再構成する
- 学習を自己評価できる（自分の学びを客観的に考察する）

2. 今年度の取り組み

(1) 昨年度の研究実践から見えてきたこと

昨年度より「問い続け、学び続ける子どもたち」という主題のもとで研究を進めてきた。その中で「子どもたち一人一人と学習課題との接点を見出し、主体的に学び続ける姿をめざすこと」、

「子ども理解を深く行った上で、子ども同士の関係性も適切にみとること」を心に留めて実践を行い、いくつかの成果を得ることができた。以下は研究の視点である「子どもの関係性をとらえる」ことに関わる事例である。（4年生体育科ゴール型ゲーム「4Cボール」の実践より）

前半ゲームのふり返りで、紫チームのユウスケは、パスキャッチが上手くいかず浮かない顔をしているトモキに「トモキはいいプレーしているから自分も取りやすく弱いパスをするからがんばろう」と伝えていた。それを聞いた教師は、前半ロングパスが多かったことと、受けやすいパスの距離を考えるように声をかけた。すると後半ゲームでは、互いが近い距離でのテンポの良いパス交換が多くみられるようになり、明るい表情で懸命にボールを追うトモキの姿も見られた。この日のユウスケとトモキの個人カードには、「近い距離だとテンポの良いパス交換ができた」ことが書かれていた。また同じチームのリサもこれまで「ボールにいっぱいさわると書いていた目標が、次時より「近くへのパスをがんばる」という、戦術的なチームでの動きを意識したものに変わった。そしてこの後、紫チームはショートパスで相手をかかわしながらゴールをめざすチームになっていった。



この場面は「トモキはいいプレーしているから自分も…」という相手意識のあるユウスケの言葉に紫チームの受容性の高まりをみとった教師が、それならばと「戦術的なパスを成功させるポイント」に気付くことができるよう声かけをしている。受容的な言葉が出ないところに、戦術的な言葉をかけても、結局は苦手な子への批判につながってしまうからである。「パスキャッチが上手くできないトモキ」のことを、チームがどう考え、どのように解決していこうとしているのかを「子どもの言葉」から捉え、適切な支援をすることが、新しいことに気付き、自己の変容を自覚するという学びを進めることになる。

このように、教師が子どもたちの言葉に着目することで、その関係性や主体性をより具体的にとらえることができることがわかってきた。また、新たな課題として、特に以下の2点が表出することとなった。

- 1、子どもたちの主体的な姿が見られた一方、人とかかわりながらの学びが不十分である。
- 2、教師が子どもの学びの筋で授業を見ることができていない。

以上のような点から、今年度は「子どもの言葉」に着目し、子どもの学びの筋を探る授業研究を行ってことにする。

（2）子どもの言葉でつくる授業とは

子どもの言葉をもとに授業が展開されることは言うまでもない。本校においてもこれまで子どもの言葉を丁寧にとり、適切に支援することで学びを成立させようと取り組んできた。しかし教師にとって都合のよい発言を取り上げてしまったり、言語表現が上手にできない子どもを見過ごしてしまったりすることもある。この点については「子どもたちの学びの筋では決着がついていないのに、教師の予定で次に進んでいることや、子どもと教師のやりたいことにズレがあるような授業を展開してしまっている。」との鹿毛先生のご指摘どおりであった。



そこで、今年度は改めて一人一人の子どもの学びを捉え直そうという思いのもと、サブテーマを「子どもの言葉でつくる授業」とした。ここでいう言葉とは、子どもの発言だけを指すものではない。子どもの発言には、そのもととなる思いや考えが必ずある。その思いや考えは言葉よりも先に表情や仕草、視線として表出されることも多い。本校では、これらすべてを「子どもの言葉」と捉え、子どもの一挙手一投足を大切にしたい授業づくりに取り組もうと考えた。

子どもの言葉でつくる授業を進める上で、子どもの発言が飛び交う授業は必要不可欠である。ここでいう発言は、指名を受けた際の発言だけでなく、課題に出合ったときのつぶやきや友だちの発言に対する反応等も含まれる。このような子どもの発言が溢れるような学級風土をつくることが「子どもの言葉でつくる授業」の第一歩である。(3-(2)参照)しかし、子どもの発言が飛び交う授業であっても、理想とする「問い続け、学び続ける子ども」の姿とは言えない。本校がめざすのは、授業中での言葉を思慮深く考察したり問い直したりする子どもである。子どもの言葉によって授業がつけられることで、研究主題に迫っていけるのではないかと考えた。

3. 研究の重点

(1) 子どもたちの学びを支える学級風土

子どもたちの学校生活をよりよいものとするためには、他者とのつながりを密にし、他者を受け入れ、互いを認め合う関係をつくることが大切である。子ども一人一人が自分なりの表現をすることが許容され、かつそれが受容されるような一人一人の居場所のある学級風土である(研究紀要2014)。本校では、学習に向かう学級の姿勢や雰囲気「学級風土」と呼び、受容的な関係づくり、聴き合い、学び合う学級風土づくりをめざしてきた。昨年度は、問う子どもを育む学級風土づくりを意識してきた。これまでも教員それぞれが独自に聴き合い、学び合う学級風土づくりは行い、互いに見せ合ってきたのだが、具体的にどのような学級風土を大切にしていけるのかを共有できていなかった。そこで、小グループによる協働的な学びを進めることで、日頃から互いの発表や意見を肯定的にとらえるようにし、共感的人間関係を構築していくことにする。例えば、困ったときに「わからない」「教えて」と言える子どもたちを育て、人に弱みも見せることができるような柔らかな教室の雰囲気にしていきたい。その中で自分の思っていることを表現して友だちに認められることを繰り返し体験させていく。低学年ではペア学習を中心に、中学年ではペアをベースにした2×2の4人グループ、高学年になると4人グループと小グループでの学びを続けていく。しかし、ペアや4人グループでの話し合いを行っていても、良いという訳ではない。子どもたちがわかったことを確認するだけの話し合いを行うのではなく、男の子と女の子、発言が多い子と少ない子、ノートを丁寧に書く子と書くことが苦手な子、生活経験を語ることでできる子と獲得してきた知識で説明することができる子などの異質なものの同士が同じグループで話し合い、新たな考えをつくり上げていくような活動にしていきたい。



(2) 子どもの言葉で学びをさぐる

子どもの学びは、子どもの内面でおきている。子どもの学びをとらえるためには、子どもの具体的な姿をもとに、子どもの内面世界に近づき、子ども理解を深めていかなければいけない。子

ども理解を深めていくには、子どものエピソードから子どもの今を解釈しようとする試みを繰り返す、蓄積し、共有化することになる。今年度は前述の「子どもの言葉」から子どもたちの学びをさぐっていく。子どもの発言や記述など見えやすい部分だけでなく、子どもの表情や仕草などの非言語であるさまざまな表現に立ち止まり、その真意や背景を丁寧に探ろうとすることは、子どもの思いや願いに寄り添うことになり、深い子ども理解につながるはずである。授業を中心に、日々生活している子どもたちのありのままの姿をとらえ、それをもとに今後展開されていく子どもの学びを見通していく。

第3学年算数科「円と球」において、円の中心を探る学習でのある子どもの言葉である。

・①円の端から端まで線を引いてそのちょうど真ん中が中心になると思う。

この発言の後「今言ったことが分かる？おとなりの子に話してごらん。」と声をかけると、となり同士で話し始めた。

- ・端から端まで線を引いてその真ん中が…。
- ・ちょっと待って端から端の端ってどこ？
- ・端はこの辺からこの辺まで。
- ・どこでもいいんじゃない？
- ・どこでもいいんやったらここからここでもいいってこと？
- ・そうじゃなくて…。



・②先生、「端から端」の端ってどこですか？

聞いていればなんとなく分かったつもりになる発言も、となり同士（ペア）で解釈をしようと、発言の解釈がうまく共有できなくなり、それが新たな疑問としてつながっていくことがわかる。ここでは②の発言こそが、円を2回折って交わる場所という見方へつながる大切な発言である。子どもたちの中には、①の言葉を聞くと②が思いつくものもいる。しかし、多くの子どもは円の端という視点に気付いていないことが多い。①の言葉を解釈し合うことが、子ども同士のかかわりを生み出し、子どもの言葉で授業が展開されていくのである。

このような姿を子どもたちに期待するためにも、まず言葉を溢れさせていきたい。体験に基づいた感覚的な言語を引き出し、表出された言語の中から本質に迫るものを見極め、価値づけていく。それは教師も行うが、子どもたちが行うようにもなっていきたい。その中では、非言語の表現を言葉としてとらえ、他の者がわかる形にしていかなないと深めてはいけない。体育であれば、身体表現だけで終わるのではなく、身体表現から喚起されたことを音声言語として表出してこと学びにつながる。子どもたちの様々な非言語的な言葉を言語化していくことが重要であり、そのズレこそが授業のポイントになっていく。協議をするときには、子どもたちの言葉が表出された授業記録を大事にしていきたい。

（3）問い続け、学び続ける子どもを支える学習プロセス

昨年度の研究を振り返り、子どもの一人一人の学びの筋を大切に、6年間で思慮深く考えることのできる子どもたちになるような支援を見直す必要があることが分かった。まず教師がそれぞれの教科の特性と向き合うことが不可欠である。その中で、教材を通して子どもが何を、そしてどのように学んでいくのかを考えていく。教師は子どもと子ども、子どもと教材がかかわることによってどのような学びが生まれるのかを探る。教師は、問い続け、学び続ける子どもたちが未来の社会で活躍できるのか、自分たちが未来の社会を創造する主体者だと自覚するように育つためにはどのような活動が必要なのかを、考えていく。本校では、課題把握・課題追究・課題解決・新たな課題の4つの活動がつながりながら発展的に繰り返される学習プロセスを大切にしていく。

子どもが自分たちで学び合っていくことをめざしていく。子どもは、学び合いの中で他者との相互のかかわりの中で、自分の考えをまとめて表現することや、新たな考えが生まれる経験をす。その活動を自ら振り返ることで、思考や表現の仕方を見直し、それらの能力を高めていくことになる。子どもが対象と向き合って思いや考えをもてる活動や話し合う場面を大切にする。対象と出合ったときに感じた感覚的なものを素直に交流する経験を繰り返し行うのである。子どもは、そのような経験を積み重ねることで、友だちとかかわりながら学ぶ楽しさを感じ、もっと友だちとかかわりたいと考えるようになる。経験を重ねるにつれて、対象だけでなく他者・自己とかかわりながら学びを振り返り、自分の考えを交流していくことができるようにしていく。そのプロセスは各学年、各教科によっても異なってくる。そのため、教師は、6年間を通して問い続け、学び続けるために各学年、各教科でのつながりがある学習プロセスの在り方を研究していく。

4. これらを生きる子どもたち

OECD では、これからの子どもたちが生きていく世界を「知識基盤社会」と規定している。知識基盤社会は変化が激しく、常に、新しい未知の課題に試行錯誤しながらも対応することが求められる社会である。国立教育政策研究所では21世紀型能力が提案され、ユネスコ国内委員会では持続可能な開発のための教育（ESD）について解説されている。急速に変化し続ける社会では、学校を卒業した後も常に学び続けていかなければならない。その際、何を学ぶかは自分で判断していかなければならない。こうした社会を生き抜くために、生涯にわたって学び続ける子どもたちになることを願っている。他者とかかわりを大切にし、友だちと学ぶことは大変意味深いものである。子どもたちが大人になったときに求められるのは、自ら思考・判断・表現し、仲間と協力しながら、疑問のあるところを解きほぐして納得のいくようにすることのできる力であろう。知識や技能は、時代や社会の変化、また子どもたちが将来就く職業によっても異なってくる。しかし、自分で目的を定め、方法をコントロールし、周囲の環境や資源を活用しながら学ぶ力は状況を問わず必要である。本校を巣立つときには、自ら問題を解決していく人になってもらいたい。

引用文献

- [1] 鹿毛雅治, 子どもの姿に学ぶ教師「学ぶ意欲」と「教育的瞬間」, 2007, 教育出版
- [2] 和歌山大学教育学部附属小学校研究紀要, 2014
- [3] 佐藤雅彰, 子どもと教室の事実から学ぶ, 2015, ぎょうせい

参考文献

- [1] 佐藤学・和歌山大学教育学部附属小学校, 質の高い学びを創る, 2009, 東洋館出版社
- [2] 秋田喜代美, 対話が生まれる教室~居場所感と夢中を保障する授業~, 2014, 教育開発研究社
- [3] 佐藤学, 学校の挑戦~学びの共同体を創る~, 2006, 小学館
- [4] 鹿毛雅治, モティベーションを学ぶ12の理論, 2012, 金剛出版
- [5] 国立教育政策研究所, 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則,
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/Houkokusho-5.pdf>
- [6] 日本ユネスコ国内委員会 ESD, <http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>
- [7] 石井英真, 今求められる学力とは, 2015, 日本標準